

け: グロウイング・ペイン  
一拓けいく看護のなかで—  
日本看護協会出版会 昭和63.3.25. 106頁

46 湯槇ます  
第10章 東京大学医学部衛生看護学科  
グロウイング・ペイン  
一拓けいく看護のなかで—  
日本看護協会出版会 1988

107 第10章 東京大学医学部衛生看護学科

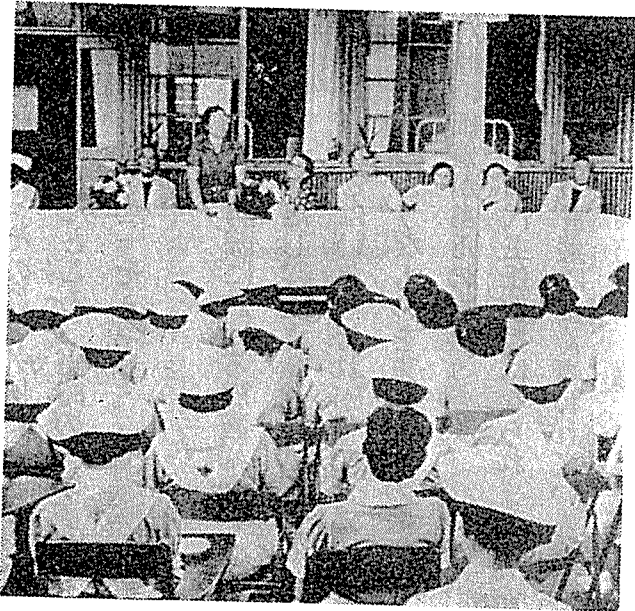
第十章 東京大学医学部衛生看護学科

東京大学医学部に衛生看護学科ができたのは昭和二八年のことでした。私どもも模範看護学院から聖路加へ帰り、最後の新しい変革の時を経て、さらにワン・ステップ飛躍しようとしていた看護に直面して、私の目標も定まったかに思えたちょうどその頃、基礎看護学担当の助教授として招きを受けました。完全に復興した聖路加の学校は、すでに短大の許可があり、戦前の主事であったミス・ホワイトが再び帰ってきていましたので、私としては聖路加から外に出て新しい仕事を引き受けてもよい周囲の状況でした。

といって何のためらいもなくすぐ招きに応じたというわけではありません。四九歳にもなつて、長年のすみかであった聖路加から外に出て新しい仕事に就くのは実に不安でした。友達に誰彼はそろそろ引退を考える頃だというのに、同じ看護の仕事とはいえ未知の世界に入



◇1954年、築地に戻って最初の卒業式の日。東大に行くことになっていた私には最後の聖路加の卒業式。



◇聖路加で開いて下さった私の送別会。

っていこうとする自分に確信はありませんでした。加えて東京大学というものに対する恐怖感もありました。たんに学問の権威に怖れをなしたというだけではなく、それまでの私にまったく関わり合いのない世界、そんな世界ではたして自分を保てるかと怖かったです。さうざん考えましたが結局のところ、伝統ある大学教育のなかで看護基礎教育が発足するのであれば、私も看護婦の一人として受けるべき責任をとればよいのではないか、と思うに至りました。

#### 東大衛看の誕生

衛生看護学科の発足そのものには私は関与していません。司令部の指導のもとに、日本の看護教育をより高いものにしなればという気運のあったことが衛生看護学科発足の背景として当然考えられましょう。一方東京大学としては、雑司ヶ谷にある東大病院の分院に戦時中あった医学専門学校が閉鎖されてから、分院の存在価値が問題となり、医学部の中に新学科を設置して分院の教育的機能を活かしたいという意向であったように聞きました。

初代学科長の福田邦三先生によれば、「次年度の予算を組むに当たり、文部省は、単一の大学に二つの看護学校があるのは必要と認めず、分院付属のものを廃して本院付属のものの一

本にする方針だ、と聞いた。どうしても廃するというなら、いっそのこと外国に多々あるような四年制の看護大学を試しにつくってみる気はないかと応じたところ、当時の大学課長H氏は、それは面白い、一つ努力してみましようという話になった」(『看護』三六卷一四号、戦後看護界出来事誌)

東京大学はぜひぶん思案したはずです。何しろそれまで大学病院における看護婦というもののあり方は、あくまでも医師の補助者以外の何者でもなかったし、たとえ法律が医師の手伝いとともに見護の独立した仕事を認めるようになっていたとはいえ、それが何であるかなどは考えられていなかった時代であったのですから。看護のようなものを東京大学の医学部の中に一学科として認めてよいのだろうか。それだけの価値があるのだろうか。

結局、衛生看護学科新設の案は通り、生理学の福田先生が初代主任教授にられました。東大側のとまどいぶりはのちに福田先生が述懐されている次の言葉によく表われていると思います。

「学科課程は法規の許すだけにつくり、授業の進行につれて、しだいに改善していくという、東大慣行のフレキシブルな方式にした。どれだけのことを消化し得る対象、どれだけの要求を以て学を求める気迫があるか、相手が一向わからない。それゆえ、この科をつくりあげる

仕事を託された者は、彫刻を刻む気持ちを棄てて、大きな樹の苗木を植え、日光と水と肥沃な土を与え見守るように、教師と学生とが相談し力を合わせて、この新しい学科を形づくっていかうと考えた。無責任といえ、無定見といえ、零歳の愛児を前にし、われら無経験の母親にできることは乳と愛だけなのであった。東大の伝統に、かつてなかった民主的型破りの無手勝流である」(福田邦三、前出)。つまり、とにかくやってみようということだったのです。

私が東大にいったのは昭和二九年で、衛生看護学科の第一回生が二年生の時でした。秋の学期からはじまる専門課程の準備をする時期になっていました。いってすぐに福田先生と一緒に作り出したのが「衛生看護学科というもの」です。この一文は今読めばあいまいな点も目立つでしょうが、衛生看護学科の当初の目的があくまでも看護にあったことをしのばせませす。三回生の入学の時からこれを渡すことができました。

その「衛生看護学科というもの」を、引用し紹介します。

#### 衛生看護学科というもの

東京大学で昭和二八年にはじめた衛生看護学科は正規の大学コースであります。世間では「大学で看護教

育をする」ということを不審に思う人が多いでしょうが、実は「看護」という言葉の意味が、本学科と世間とはちがうのです。

#### 言葉の説明

「看護」ということは、世間の大部分の人はしろうとにもできるような病人の「みとり」をすることだとか、病人の用事をする下婢の役目をなすことだと思っただけです。また今までの病院を知っている人は、看護婦は医師の手つだいをする補助員だと思っただけです。これは日本が、ナイチンゲール以来現在までの間の世界の看護サービスの発達について行くことができず、取り残されたことを意味するのです。そして今となってはヨーロッパ、アメリカのナース (nurses) を「看護婦」と訳し、かの女らがするナースィング (nursing) を看護と訳すことが大変な誤解を招くようなありさまになってしまったのです。

ナースィングは「はぐくむ愛の心づくし」であります。自分の子供に対してでも、患者に対してでも、社会民衆に対してでも、学校において学童に対してでも、産業界の労働者に対してでも、すべて健康を回復し、確保し、増進するように世話をすることをナースィングといふのです。衛生といっても同じことです。乳幼児哺育も妊産婦の健康指導も、学童の養護も、部落の健康管理も、事業場の衛生管理もみなナースィングです。病院では積極的に治療を企画するのは医師ですが、これに呼応して患者の一般的条件を整え、身体的にも、精神的にも、社会的にも、遺憾のないように慈愛と思慮とをもって、患者の回復を促進するような措置をするのが臨床ナースの役目です。

#### 本学科のねらい

近代社会の不可欠の要素として、このような保健活動をする婦人、すなわち欧米的な意味での有能なナースを看護婦、保健婦、養護教諭として日本にもほしいものです。それにはまずその指導者も養成したいのです。そして日本の民衆のために本格的なナースィングを広めようというのが本学科のねらいです。もちろんナ

ースィングの理論や技術について、真理の解明や方法の改善は本学科の重要な研究課題であります。

近代的ナースィングをもって人々のあらゆる意味での健康を回復、保持、増進するようにつとめるためには、心に深い人間愛をたたえていなければならないことはもちろんですが、なおその上に患者の状態と医師の処置とを理解するに必要な医学知識、保健衛生学の専門的知識、心理学および社会学でとり扱う人間生活の充分の理解および実施する看護技術の学問的把握と熟練とが必要であります。それで本学科では一般教養としての大学教育を正規の課程で授けた上に、八講座の陣容をもって科学的裏付のある本格的なナースィングの教育を実施し、右のような能力のある卒業者を世に送るよう努めています。

#### 卒業後の活動分野

かように看護、保健に関して指導的人物になるような人を養成するのが当学科の目的ですから、卒業後は看護婦、保健婦、衛生管理者あるいは教職員、技術者、研究者等の資格で種々な方面、たとえば医療(臨床看護)、公衆衛生(都市衛生、農村衛生、母子衛生、学校衛生、社会福祉、人口問題、更生補導、産業保健管理等)や健康教育(養護教諭、保健・理科の教諭)関係の諸方面に就職してもよく、研修を重ねた上で看護学校の専任教員や看護短期大学の教授になることも希望されています。また日本を代表して看護の国際的会議等に出席し、外国の専門家と対等な討議に参加するような任務も将来当然この卒業者に期待されることです。

#### ただ一種のコース

衛生看護学科には右に述べたような、指導的なナースたるに必要な課程をもつ、ただ一種のコースしかありません。そして入学から卒業まで四年間直通しており、途中から他学科に転じる便宜はありません。

また在来の病院で経営する看護学校とはちがいが、大学課程の一学科ですから、入学試験、授業料等も一般の東京大学入学者の場合と同じですが、入学選考は当学科志望者だけの間で行います。なお学生に対する給費制度はありませんが、なるべく多数の学生に奨学金貸与の便宜が与えられるよう努力しています。

寄宿舎（女子学生寮）は、充分の臨床実習をする関係上、第二学年以上の全学生を収容するよう大学基準で定められています。国家予算の関係で現在では一部分しかできていません。定員は二三名ですが目下満員です。

建物の新営は今後ですが、現在使う施設は東京都文京区雑司谷町一二〇 東京大学医学部附属病院分院構内に処置を講じています。ただし入学後最初の一年半の教育は東京都目黒区駒場町八六五 東京大学教養学部にて委託されます。入学に関する事務はこの教養学部でとり扱います。

東京都文京区雑司谷町一二〇

東京大学医学部衛生看護学科

### 看護学を産む苦しみ

さて看護の授業が始まったわけです。スタッフは私のほかには公衆衛生院にいた故中道千鶴子さん、聖路加を出て司令部で通訳をしていた滝沢稔子さん、やがてやはり聖路加を出て鹿児島大学の看護学校にいた今村(宮内)節子さん。それから間もなく木下(亀田)安子さんなどが加わりましたが、一口に言って、力不足のみじめな出発でした。今でこそそれぞれの分野で良い業績をあげているスタッフが集まっていたのですが、何といても教える内容が誰にも自信がなかったのです。現に手にしている看護技術をそのまま大学の専門課程で教えられ

ばよいとは思えませんでしたが、そんなことだけを教えるための大学課程看護基礎教育ではないと思いました。

私と中道さんはアメリカの大学へ二回も行ってきますし、看護大学について少しは知っていたつもりでしたが、大学にふさわしい看護を学士課程から段階を踏んで学んできたわけではないので無理があったのです。要は、看護に学問はあるか、無いのではないか、あるなら出してみよ、という問題だったのです。持てるものはすべてさらけ出し、加えてヘンダーソンの教科書、Harner and Henderson: The Principles and Practice of Nursing. Fourth Edition, Macmillan, 1951. その他主としてアメリカの看護の本を読みまくって「看護とは？」を求め、いくらかでも大学にふさわしい学問性のある授業を持ちたいと、眠る時間を惜しんで机に向かいました。ただし、一心不乱の勉強であったとはいえ、めっちゃくちゃなものだったと想い出されます。

私も悩みましたが、学生の失望と悩みの方がはるかに深刻であったでしょう。それよりも東大全体が看護に失望したというのが事実だったと言っておかねばなりません。

### 東京大学の望む「看護学」

大学の教養課程に従来の看護教育を付け足せばよいなどは毛頭考えず、看護そのものを大学レベルのものにしなければと迫られていました。アメリカの最も初期の看護大学というものは、この大学教養課程プラス看護技術教育というかたちでなされ、テキサス大学などにできたのですが、こうしたものは歴史的にみて看護の大学教育としての位置を与えられていません。従来の看護教育と比べて本質的な違いを説明できる何ものもないからです。この点は問題外として、私の頭の中にはトロントで勉強した時に経験したアメリカの看護大学教育、そしてコロンビアやエールやカリフォルニアなどの大学で行なわれている上級課程 (advanced course、看護学校を卒業してから入る) の教育のことが始終去来し、それらを学問としての価値ある看護教育であると思っていたのでしようが、東京大学とアメリカの大学との間には大学という規準にそもそもずれのあることにすぐ気づきました。それはアメリカの大学が社会に役に立つように応用力をつけることに主眼をおいていたのに対し、東大では学問的な力をしっかりとつけるのが主眼でした。これはどちらが良いとか悪いとか、また高い低いの問題ではなく、大学としての行き方の違いです。

私たちは看護を東京大学の望むような学問にしていかなければならなかったのです。アメリカでは看護はともかく独立して社会に存在していましたから、それをどういうふうに大学教育に持込むかということにもっぱら努力を払うことができました。一般大学の中に専攻科というかたちで看護を組み入れるやり方、これは看護教育者や看護管理者のための教育として出発したのですが、それに始まって、次に大学四年課程の看護基礎教育、第二次世界大戦の頃には看護の修士課程、そして七〇年代初期には六つの博士課程ができています。

東大の場合は出発点がまったく違います。日本の社会では看護は依然として手先のわざにすぎず、そのわざも大学教育で教えねばならないほどのものではあるまい、という状況にあっては、看護を大学の課程で展開していくのがいかに困難であったか、想像していただけでしょう。

とまどいの一時期が過ぎたあと、私は周囲が助けてくれ、育てられるつもりならば、看護の学問を創り出していくことができると思いました。事実、衛生看護学科が発足するにあたっては反対されたに違いない先生方が、出来た以上はという姿勢でいろいろな援助をしてくださいました。緒方富雄先生は、冬のさなか、午後二時頃から夕食もとらずに九時頃まで、衛生看護学科を作った医学部の考えを聞きたいという学生の質問を共に受けて立ってください、学生と私たちの両方に、出来た以上は何とかしてやっという気構えを示してく

ださいました。三浦義彰先生、故勝沼晴雄先生、故細川宏先生たちも、看護の学問性を育てるにはどうしたらよいかを、それぞれの専門の立場から真剣に考えてくださり、学生の教育にあたってくださったと思います。

学問が無いという学生の発見と失望、一方創っていきましようという先生方の支持の中で、私はといえば、自分には解らないことがたくさんあり、それを解いて学生に教えるだけの力も材料も十分持ち合わせていないことを、そのまま学生たちにさらけ出していました。ある意味で自信に満ちていた聖路加時代とはまったく違った印象を周囲に与えたのは、この辺に由来するのでしょうか。しかし前にも述べましたように、その時々で私はいつわりなく誠実に努めていたと言い切れます。

それまで住んでいた聖路加のアパートを出て巣鴨に家を一軒借り、中道さんと二人で暮らし始めました。できるだけ納得のいくクラスを持つとうと思えば、每晚ほとんど朝まで本を読むということになり、寝不足のからだをタクシーで雑司ヶ谷に通う毎日で、相当こたえました。最初の三ヶ月でスカートがぶかぶかになったものです。滝沢さんは家庭を持ちお子さんもあるという事情で、こういう暮らしを続けることができず、間もなくして衛生看護学科を

退かれました。中道さんもリュウマチのために長い病床につかれましたから、出発当時はほとんどひとりで苦しみながら看護を追っていたのです。やがて先ほどあげた今村さん、木下さんのほかに、大森文子さん、橋本秀子さん、戸次（飯田）澄美子さん、宮島（馬場）昌子さん、故大塚寛子さんなどの若い看護教師陣が増え、講座も看護基礎医学・基礎看護学・公衆衛生看護学・臨床医学看護学の四つが整い、協力して勉強できる時がきました。

GHQの二代目看護課長をされて、当時、ロックフェラー財団の東京駐在員であったミス・オルソンの援助を得て、ロックフェラー奨学金で若い人がつぎつぎにアメリカへ勉強に行きました。初めアメリカから帰られて東大助手になったのが宮島昌子さんです。卒業生では一回生の今泉（兼松）百合子さん（現千葉大学看護学部助教授）、二回生の林滋子さん（現北里大学看護学部教授）が招かれています。

ロックフェラーの援助はこれだけではなく、衛生看護学科が看護の学校であるというのに実習場にはシーツをはじめもろもろの看護用物品がまったくなく、患者を清潔に保つのもおぼつかない状態にあった東大分院に困りはてっている時は、そうした物品の提供もしてくれました。

私は基礎看護学講座の主任でしたが、臨床も含めて看護のスタッフ全員の責任を持つ立場

にありました。それらスタッフの中には私が指導的な意見が十分でないことを、もの足りなく思っていた人もいたことでしょう。大学にふさわしく創意をどんどん発揮して追求していくよう、みんなの足並みを揃えることに困難を感じていた私が、ルーズで責任者の務めを果たしていないというようにもみられたのでしようが、私としては道のない山を登っている想いでした。知らなくてはならないことがたくさんあったので話し合いをする前に皆で本を読まねばならないことも再三あり、無闇やたらに本を読みなさいと言う、とも非難されましたが、けっして読みっぱなしでよいというつもりではありませんでした。

講座、つまり大学の教室を、型にはめて、私と同じように考えるようにし向けるのが責任者であるなどとは私は断じて考えませんでした。今でもその意見は変わりません。ただ学生たちは、私のこのやり方に不満を感じながらも、この学校が育たなければいけないのだと、こちらはこちらの努力をしている点は汲みとってくれたと思うのは、自己満足でしょうか。少なくとも無いものを有るかのごとく思わせられはしなかったはずです。

それにしても、看護には学問がないと失望し激しく反抗していた学生たちの姿を、私は忘れようありません。何故かと聞かれて答えられない実情の前に、私はただ胸の迫る想いで気折れがしたり、ここに踏みとどまってはいけないのではないかと迷ったりしました。けれ

ども、私が何も無いことをさらけ出していたがために、やがて卒業していった学生たちは「看護とは」を求める姿勢を持ち続け、結果として、少数とはいえ今日の看護に力を尽すことができていると思いたいです。怪我の功名といっておこがましいのですが。

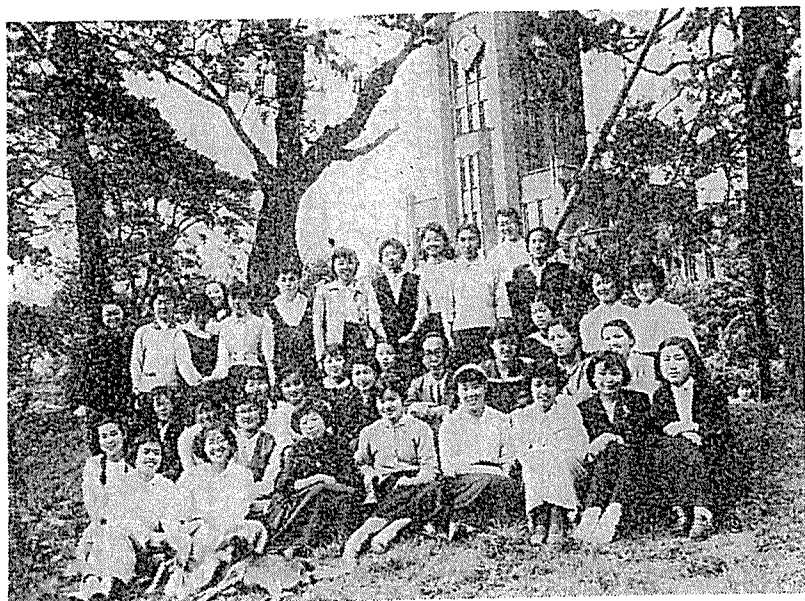
東大での看護学を産む苦しみを想いますと、いくらその後時代が進んだからとはいえ、私は簡単に看護の大学を作ろうとする、あるいは作れると思っている人びとに警告を発したいのです。本当の大学を作るのであれば、それはもう大変な仕事であることを解ってもらいたいし、本当の大学を目ざして慎重に実のある学校作りを進めてもらいたいです。形ばかりの大学は論外です。

#### 講座の活動

私のことばかり話したようですが、スタッフの若い人たちもクラスのために寝ずの勉強をしていたのを忘れもしません。

彼女たちはとりあえずは、学生に教える看護技術のひとつひとつを、どうしてそうするか、何故そうなのか、を説明しようとするだけで手いっぱいでした。研究活動が始まったのはやはり卒業生が出てからでしたでしょう。看護の基礎理論の組み立てを試みだしたのも、





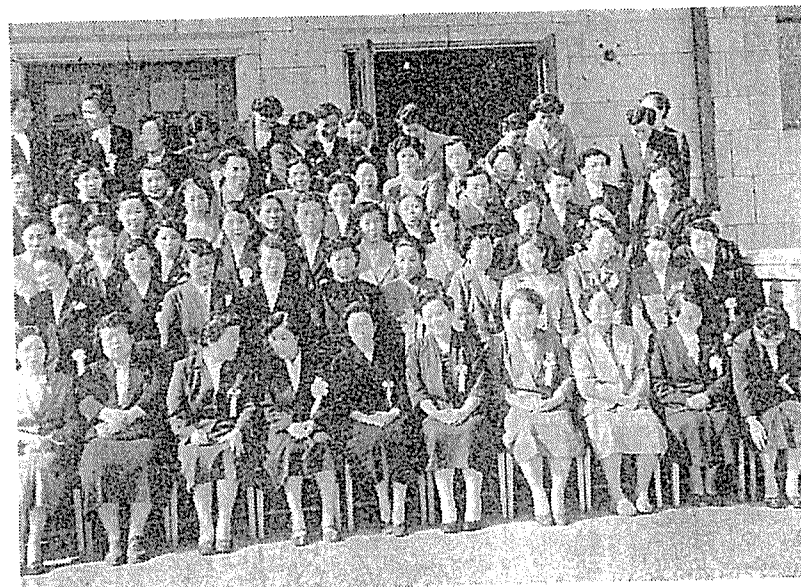
◇東大衛看3回生。この年から「衛生看護学科というもの」(p.111)が配られた。角田先生をかこんで伊藤さん、草刈さん、前原さん、小玉さん、深山さん、桐室さん、千葉さん、矢野さんら。



◇卒業生たちと。左より金子光さん、木下安子さん、湯楨、小玉香津子さん、前原澄子さん、林滋子さん、清水嘉与子さん、金井克子さん。



◇協会役員としての陳情活動。昭和31年厚生省にて。



◇昭和34年看護婦会評議員。私の隣は大森文子さん。

その頃になってからでした。文光堂から出版された『看護の基礎』は当時の基礎看護学講座の一成果です。ちぐはぐなところもありますが、みんなで力を合わせて作り上げた看護でした。

衛生看護学科の時代は勉強に追われてまたたく間に時を重ねた感があります。その間看護協会長を務めたり、文部省や厚生省の看護教育関係の会議にも出席したりしましたが、それらに関しては別枠で話したいと思います。看護の探究途上、私にとって最大の事件であったといえるヘンダーソンの『看護の基本となるもの』との出会いについても、すぐこの後で別に話させていただくつもりです。

#### 保健学科に

ところで、衛生看護学科は発足後一二年目にその名称を保健学科と変え、発展的に解消したということになっています。私が東大を停年退職した直後のことでした。東大の一学科として、看護が柱では何とも弱いという事態に立ち至ったからでしょうが、この点については、もう一〇年保ってほしかった、と私は重ねて悔んでおります。一〇年くらいでなくしてしまつては、作つた意味がないのではないのでしょうかと。

けれどもこのような改革が行なわれたのは、端的に言いますと、この学科が東大の中で特別な条件を持ち過ぎていたからだと言えましょう。当時の東大は文科一類・二類、理科一類・二類に分かれて受験するようになっていましたが、衛生看護学科は第五の科類として受験するように決められ、しかも女子のみに限られていました。医学部には当時、医学科、薬学科がありましたから、この学科ができて三学科になったのですが、衛生看護学科の学生だけは入学と同時に衛看生として登録されて教養学部時代を過ごしたのです。専門科目は二年後期から雑司ヶ谷にある分院の校舎で受けるようになっており、そこには本郷のキャンパスのように大学の雰囲気がないことも学生たちには不満のたねでした。また東大では大学院を持つのが当り前のことですが、その形に持っていくには看護学はまだ不足があるということもありました。

というわけで大学院の修士課程の準備が進む中で、急速に学科名を変える方向にいったようです。衛生看護学科の受験生が減って来たことも、これに拍車をかけました。表向きにされた改称の理由は、学生がなんとも可哀想だから、ということでした。一般の東大生との間に差異があるのは、学生にとってよいことではないというのでした。名称を変えて、本郷に

キャンパスを移し、駒場でも他の学生と同じ扱いをしようというのです。これは私にもよく解りました。

しかしまず女子の枠組をはずして入学試験をしたら、東京大学ですから当然男子が主となるでしょう。それでは、日本の伝統的な考えからすれば、看護がこの学科の柱になれるなどはとても考えられないということでしたが、名ばかりでなく当然内容を変えざるを得ないでしょう、という危惧を抱いたのが本当になりました。看護は保健学の体系の中のひとつの講座に縮小されました。後から、当時学科主任であった塚原国雄先生や浦口健二先生が、将来のことを熟慮してああいう形にしたと話してくださいましたが、私は衛生看護学科の将来に對して、教師の側に最初から大きなずれのあったことを感じました。

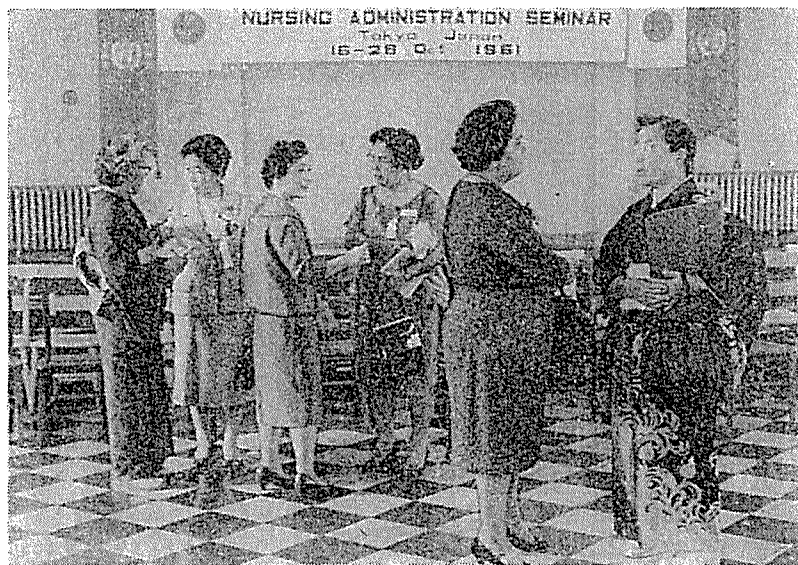
学科の名称が変わるとともに看護が保健学の中の一部、つまり保健学科の中のひとつの講座として存続することになったわけですが、衛生看護学科は少なくとも看護の発展をめざして教育や研究を行なう、その中心となるべき存在でした。病人の看護に出發して健康のあらゆるレベルにまで広げていける看護を追究し、直接的にあるいは間接的に、よりよい看護サービスを担うことのできる人材を育てることがその目的でした。あと一〇年衛生看護学科が存続していたら、つまり看護を柱としたかたちであと一〇年進められていたら、どんなに

か良い人材を供給できていたかと思ひ、本当に残念です。

看護の立場からみた保健というものについて私の考えを述べてみましょう。

保健とは文字通り人間の健康を守ることなのでしようが、健康を守るといってもいろいろな守り方があり、保健学はあくまでも人間の健康な状態に主眼点を置いた発想です。ところが看護はその出発点として、人間の病気あるいは苦痛を見かねて手を差し伸べてきたという長い歴史を持っています。そこからだんだん眼を広げていって健康の保持増進というレベルに主眼点を移していった、ようやく健康な状態の守り方というところまで進んできたのです。つまり私たち看護に打ち込んできた人間は、世界どこでも初めは病人の看護があり、病気の予防から保健にと進んできて、その保健の部分を担うのが公衆衛生看護なのだからという共通の理解があると思ひました。とすると、看護が保健の一部だなどとはとても考えられません。むしろ看護の一部分が保健である、とこう考えるわけです。

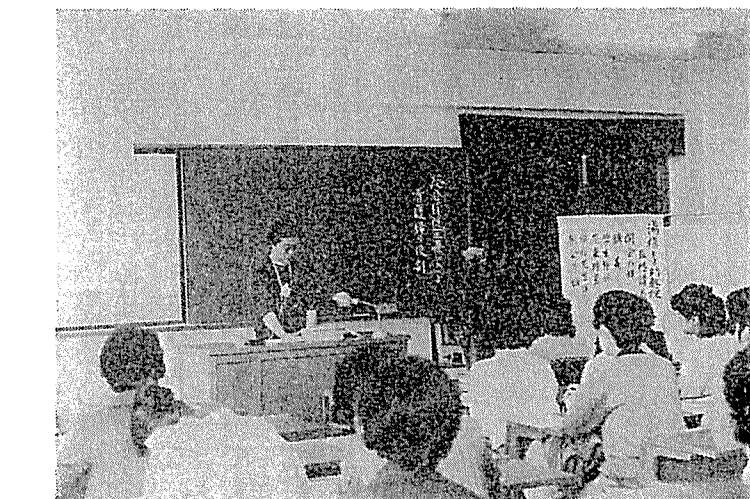
少しわきへそれますが、上記のような考えからして私は、保健婦という呼び名にかねがね疑問を持っています。何故そのまま看護婦ではいけないのでしょうか。日本の保健婦のような仕事をする人は世界中で公衆衛生看護婦 public health nurse と呼ばれていて、きわめ



◇聖路加で開かれたWHO西太平洋地区看護管理セミナーに参加（1961年）。日本の看護もこの頃から急速に国際社会に入っていた。



◇日本看護協会会長として通常総会に。



◇東大を去る日。最終講義は「総合保健医療における看護の役割」。講義終了後に開いていただいたパーティでは1回生から9回生までの卒業生をはじめ看護、医学、その他関連分野から多くの方々が私を祝ってください感謝であった。上は、福田先生のお言葉をいただく。

て自然に看護婦 nurses であります。彼女たちのすることはサービスのかたちとしては今後さまざまの発展が予想されますが、いずれにせよ看護以外の何ものでもありません。たとえば、家庭にいる寝たきり老人の機能回復訓練などが、これからますます重要となってくるサービスでしょうし、病気にならないための保健指導もますます個別に進められる必要性が重くなっていくでしょう。これらはみな看護です。保健婦という名称は日本の特殊な時代的要請で、その働きの意味を強調しようとしたひとつの表現ではないでしょうか。

このような感覚から言いますと、保健学科のめざすものが、人間の病気から健康の増進までのすべてを包括する広義の保健学ならともかくとして、医学科とは別に病気の予防や健康の増進といった狭義の保健学を意味するのですから、看護をこの中の一部分として押し込めておくには無理があるというものでしょう。このような構想に対して看護は、あまりにも大きな内容と歴史を持ち過ぎているという実感が湧きあがってきます。看護の発展という観点から言えば、多少学生にハンディがあっても、看護を柱とした学科として続いているのと、今のように保健学科の中に存在するのと、どちらがより意味があるでしょうか。誰が考えても前者だと思えます。

実際、衛生看護学科が名を消した頃から、看護は国家的な主要問題として定着し、看護大学や短期大学を作っても先生は得られず、質量共に高まる看護の需要にどう対処してよいか、誰にも見当がつかないありさまです。もし衛生看護学科が存続していたら、今どんなに貢献できたか、それを思うと心残りではありません。将来を真剣に考えていたら、衛生看護学科を保健学科に変えることは、もっと慎重に考慮されてもよかったと思います。今日の日本の医療問題が違ったかたちには、つまり今よりは患者にとって好ましいかたちになっていたかもしれません。同じく閉じられたとはいえ、何かの学士課程を終わってから看護の基礎課程を学ぶというエール大学の看護学部は二五年ほどを重ね、ほかに看護の大学がたくさん育てきたからその設立の目的は果たされたというので閉校したわけです。

看護を探究する仕事は五年や一〇年ではできないということは、東大に行って一、二年で気付いていました。どうして今までここまでしか来られなかったのかと思ひ、ことは私だけの仕事ではない、いつまでも続いていくであろう、そのごく初めの礎を、と思ひを固めた時は、もう衛生看護学科は終わりでした。その時までには到達していた時点は、看護には学問があると無理に頑張らなくても、看護の仕事が認められればおのずから総合保健医療の中に位置を確立し学問も創られていくであろう、というところでした。医療とは、看護とは、と二分して考えたりしないで、もっと自然に看護にできることは何か、しなければならぬこと

は何か、それは何故か、が問題なのである、と解ったのです。

これからという時に定年を迎えて衛生看護学科を去る日がきたのは残念でした。幸か不幸か保健学科になる前でした。しかし三〇〇人あまりの卒業生が出ています。共に学んだスタッフの人たちもいます。これからの望みを託して、それも上記のように足がかりがどうやら判ったところで望みを持って東大を去ることができたのは、当初のあの絶望的な無の状態に比べればまだしもでした。その当初の絶望的な無の状態についてさえ、学生に上げる上げられた感覚について言えば、そうされたからこそここまで考えてこられた、と今では感謝の気持ちで思い出すことができます。

衛生看護学科の卒業生に対する期待をもう少し述べておきましょう。過去をふり振り返りを見まわすに、他人に判断を下してもらって、そのまますぐに役に立つものを自分の手に欲しいという姿勢を見せる看護婦がまだ多いように思います。いうなればスプーンで食べさせてほしいと願っているのです。衛生看護学科の卒業生はそうではありません。むしろスプーン・フィーディングを拒むといっているでしょう。自分で判断してからそれを栄養にして育つことに喜びを覚える人たちだからです。これが大学教育の成果でした。彼女たちには未熟な部分もちろんありますから、つまずいたり摩擦を起こしたりすることもいろいろありま

しょう。が、自分で考えて判断することのできるこの人たちは、看護の存在を確かなものにしていくプロセスで、良い仕事をしていってくださるだろうと思います。

#### その後の経緯

衛生看護学科が保健学科に改組されてしまったことについて、私の考えをいろいろと述べてきましたが、その心中には、いつの日にか看護の仕事の大切さが認められて看護学科の独立や看護学部への発展も、という捨てきれない夢がありました。それは看護学講座に卒業生が入っていたからです。卒業後臨床看護の道を選んだ一回生と二回生のなかから一人ずつアメリカのカリフォルニア大学ロサンゼルス校で看護学修士号をとって来ましたから、きつと道を拓いてくれると期待していたのです。結果は期待はずれに終わりましたが、そのいきさつを若い人達に正しく知ってもらえるようにすることが、今の私にできる精一ぱいのことです。幸い幾つかの資料が私の手もとにあります。いずれも公刊されているものばかりです。特別な資料ではありませんが、衛生看護学科がどのように変質していったか、その真実の姿を映し出すことのできる客観的な材料です。非力であった自分自身への痛恨の思いをこめて、こうした材料が埋もれてしまわないよう皆さんにお伝えすることにいたしました。

内容は、看護学の教育・研究に直接関係のあるものだけにしぼりました。

## 1 講座名がどのように変更されたか

衛生看護学時代の講座名は、看護基礎医学第一講座、同第二講座、基礎看護学講座、公衆衛生看護学講座、臨床医学看護学第一講座、同第二講座、同第三講座、同第四講座の八講座でした。保健学科に改組された四〇年四月からは、人類生態学講座、疫学講座、保健栄養学講座、看護学講座、保健社会学講座、成人保健学講座、母子保健学講座、精神衛生学講座となり、翌四一年四月から保健管理学講座が増設されて九講座になりました。

## 2 カリキュラムがどのように変更されたか

保健学科になった時は、衛生看護学科に入学した学生がおりましたので、新しいカリキュラムになったのは昭和四三年度からでした。その大きな変化は、必修科目二単位、選択科目二単位であった看護学四単位が選択科目になったことです。そして昭和四七年度からは選択科目の看護学は二単位に減らされました。もちろん、保健婦、看護婦国家試験を受験する者には補足選択科目一六単位を履修させていました。但し、『東京大学医学部便覧』にはこの内容はのせてなく、備考として保健婦、看護婦（士）の国家試験受験資格取得に必要な授業科目は別に定める、となっているだけでした。

その後、五七年度からカリキュラムの改訂作業が行われ、五九年三月の改正案では看護学二単位が必修科目に、選択科目は四単位において、その枠のなかで受験資格をとらせようという考えになっています。これは、看護を選択したい、看護婦資格もとりたいという学生が出てきたことからとられた措置だったと思われます。こうした保健学科の看護教育の実態は文部省でも度々問題視されており、五九年一〇月末に文部省看護学視学委員による視察が行なわれました。その結果、この改正案は実施できなくなり、急遽看護学教育を明示したカリキュラムのつくり直しが行なわれ、六〇年一〇月に専門課程に進学してきた学生から新しいカリキュラムが実施されることになりました。

こうして『医学部便覧』にはじめて看護学教育の内容が明示されたのです。この頃の私はやっと私のグロウイング・ペインも終るかと思いきや浮き浮きしていました。ようやく東京大学で看護の大切さを認めてくれるようになったと思っていましたのに、昭和六十一年に入り、夢はふつりと断ち切られたわけです。

でも考えてみれば看護学は独立した専門分野でありますから、保健学科の掌中で細々とその専門性を主張することよりも、看護学部として独自の教育・研究を推しすすめていく道を選ぶのが本来のあり方だといえましょう。私も新しい夢を皆さんに託し、背中を伸ばして生

きついくことにはいたしましう。